

関西大学大学院工学研究科 学生員 ○衛藤貴朗
関西大学工学部 正会員 三浦浩之
関西大学大学院工学研究科 正会員 和田安彦

1. はじめに

都市化が進展し、市街化区域が広がるにつれて、人が自由に遊んだり自然と触れ合ったりする場としてのオープンスペースは減少している。都市域では身近なオープンスペースといえ都市公園がその代表となり、オープンスペースとしての公園の役割は重要となっている¹⁾。そこで本研究では、都市公園として、市街地に位置するため池公園で、アンケート調査を行いたため池公園来園者の意識を把握し、整備に関する方針を明らかにした。

表—1 アンケート概要

項目	内容
調査期間	平成 13 年 11 月上旬～2 月上旬
有効回答数	298
アンケートの内容	① 回答者属性 ② 来訪頻度、来訪目的 ③ 公園施設に対する感じ方 ④ 給餌活動の禁止についての意識 ⑤ 公園施設に対する要望等

2. 対象ため池、アンケート調査概要

本研究で対象とする A 池は都市域に位置するため池公園である。公園面積は 30ha(池面積：10ha)を有し、周辺は住宅地に囲まれている。A 池には毎年多くの渡り鳥が飛来することから、メディアにも数多く取り上げられ、自然豊かな野鳥とふれ合える公園施設として、周辺の市民のみならず遠方からも多くの人々が訪れる都市公園となっている。

アンケート調査は A 池利用者を対象として行った。調査方法としては、A 池利用者に対して直接面談し、協力をお願いする形でアンケート調査を行った。調査概要を表—1 に、回答者属性を表—2 に示す。公園利用者の特徴として市外在住者の割合が 4 割を占めることがあげられる。

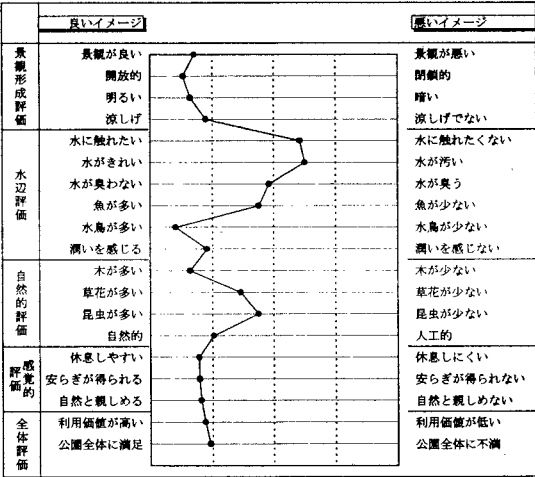
表—2 回答者属性

属性項目	属性内容
男女比	男性(41%), 女性(59%)
居住地域	市内在住(61%), 市外在住(39%)
年齢	10 代(5%), 20 代(22%), 30 代(28%), 40 代(10%), 50 代(14%), 60 代(18%), 70 代(3%)

3. 公園の構成要素に対する評価

利用者の公園施設について抱いているイメージを SD 法(Semantic Differential Method)を用いて評価した。公園施設に対するイメージの平均値を図—1 に示す。公園に対するイメージは、「景観評価項目」、「水辺評価項目」、「自然的評価項目」、「感覚的評価項目」、「全体評価項目」の 5 つの要素に分類した。

「景観評価項目」、「感覚的評価項目」、「全体評価項目」では利用者のイメージは良く「水辺評価」に関する項目では利用者の評価は低い。公園利用者は広いため池の景色に見晴らしの良さを感じているが、ため池の水そのものに対



図—1 イメージのプロフィール

しては、低い評価をしていることが分かる。また、景観の良さが心理的にやすらぎをもたらし、公園施設に対する評価を高めていると考えられる。

4. 満足意識に対する構造解析

公園利用者の公園に対する評価の性質を把握するために、因子分析による解析を行った。分析の結果、第1因子は「感覚的満足評価」、第2因子は「景観評価」、第3因子は「植生・生物評価」、第4因子は「水辺評価」、第5因子は「緑量評価」と解釈した。

次に、それらの評価項目を通じて、公園利用者が公園に満足を感じる評価要因を明らかにするために、利用者の満足度と評価の位置関係を図-2,3に示した。感覚的評価の高さと「満足」に強い関連性があることが分かる。また、景観評価の良さと「満足」にもやや関連性は見られるが、水辺評価の高さと満足には関連性はほとんど見られない。公園利用者が水辺の存在よりも空間的な広がりやの存在を求めて来訪していることが考えられる。

空間的な広がりに対する評価は、居住地域の周辺環境により影響されることが考えられるため、市外在住者と市内在住者に分けて空間評価を行った。図-4,5より、市内在住者に比べ市外在住者は「満足」と景観評価の関連性が弱いことが分かる。

5. まとめ

利用者の意識の構造を解析した結果、次のことが明らかになった。A 池公園では利用者は水辺を求めて公園を訪れるよりも、空間的な広がりやを求めて公園を訪れていることが明らかになった。また、公園利用者の意識は居住地域によって違いが見られた。これは居住地域によって住宅の密集度合い、畑や公園等のオープンスペース存在の有無には違いがあり、居住地域周辺の物理的な空間量が違うことに要因あると考えられる。A 公園の位置するような都市域には、空間的な広がりややすらぎを感じることでできるようなオープンスペースがあまり存在しないため、利用者はそのような空間を貴重であると感じ、満足感を抱いていることが考えられる。都市公園の整備に際しては、遊具等の具体的な施設をつくることだけでなく、視界の広いオープンスペースをつくることも重要である。

今後はさらに地域ごとに、物理的な空間量と人々の感じ方、意識について評価しさらに解析をすすめ、生活周辺環境の物理的な空間量と意識の関連性を明らかにしていく必要がある。

【謝辞】最後に本研究を行うにあたり、アンケートに協力していただいた住民の皆様方、ならびに調査にご協力頂いた研究室の方々に謝意を表します。

【参考文献】1)畔柳昭夫、渡邊英後、都市の水辺と人間行動、pp102、1999

表-3 因子分析結果

変数名	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子
景観	0.28	0.56	0.30	0.02	0.29
開放	0.34	0.54	0.06	0.03	0.14
明るさ	0.28	0.65	0.07	0.11	0.02
涼しさ	0.18	0.43	0.06	0.06	0.24
水に触れ	0.01	0.03	0.18	0.53	0.03
水きれい	0.10	0.11	0.06	0.86	0.16
水臭い	0.18	0.07	0.01	0.33	0.49
魚多さ	0.08	0.04	0.13	0.04	0.12
水鳥多さ	0.08	0.08	0.22	-0.03	0.18
潤い	0.28	0.36	0.09	0.11	0.55
緑多さ	0.28	0.26	0.36	-0.01	0.41
草花多さ	0.14	0.20	0.65	0.07	0.04
昆虫多さ	0.03	-0.12	0.69	0.27	0.00
自然的	0.41	0.28	0.46	0.16	0.13
休息	0.68	0.12	0.21	0.10	0.16
安らぎ	0.81	0.30	0.05	0.03	0.26
自然観	0.68	0.28	0.16	0.12	0.21
利用価値	0.66	0.37	0.17	0.00	0.13
満足	0.60	0.35	0.14	0.02	0.17
固有値	3.1	2.0	1.6	1.3	1.1
寄与率(%)	16.2	26.8	35.0	41.9	47.9

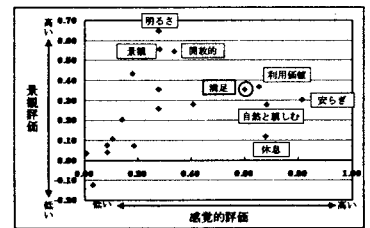


図-2 感覚的評価と景観評価

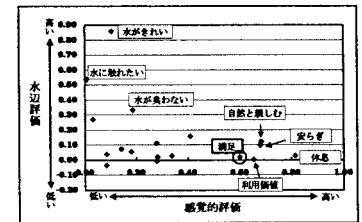


図-3 感覚的評価と水辺評価

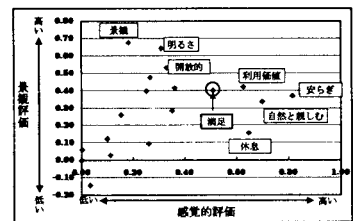


図-4 感覚的評価と景観評価(市内)

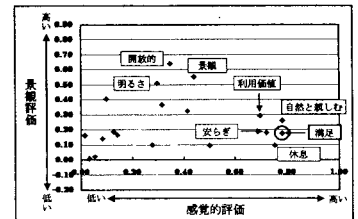


図-5 感覚的評価と景観評価(市外)